
笑い日和。

大野さいころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑い日和。

【Nコード】

N1856BA

【作者名】

大野さいころ

【あらすじ】

剣も魔法もバトルもないが、幼馴染あり駄妹ありハーレムありの学園コメディ。力を抜いて読んでいただきたいです。
たまにショートストーリーも投稿します。

投稿は不定期です。

#1 いつもの風景。(前書き)

はじめまして。大野さいころと申します。

到着地点を見つけないまま出発してしまったので道に迷うかも知れませんが、

どうか温かい目で見守っていただければ嬉しく思います。

#1 いつもの風景。

気がつくと見たこともない場所にいた。

……なんてことはまったくなかった。

ここは2-B、つまり俺―大藤功こうがつい先日、四月の頭からいるクラス。

そういえば授業中だったっけ？

まあ少しうとうとしてしまうのはおそらく学生なら誰しも経験があることだし、特に気にしないで教科書とノートの確認をしようとしたところであることに気がついた。

静かすぎるのだ。

いや、授業風景としてはこれ以上ないくらい正しい状況だけど。

このクラスに限っては静かすぎることは異常なのだ。

普段はあまり真面目な生徒がいないのかコソコソ話したりゴソゴソ何かしている音がするのがこのクラス。

授業なんて真面目に受けるのは真面目な委員長とその他少数だ。

周りにクラスメイトがいるから寝てる間に教室移動があったわけでも、皆が急に真面目になったわけでももちろんないだろう。

俺が一人疑問に思っていると、後ろから背中をシャーペンで小突かれた。

伊藤恵めぐみ。クラスメイトであり、俺の親友でもある女子。

恵とは去年知り合い、どうしてだったかわからないが意気投合して

仲良くなり現在にいたる。

現在席は俺の後ろで、授業中もよく今みたいに背中を小突かれるのでいつもなら特に驚いたり声を上げたりはしない。

そう、いつもならである。

「痛いわ!!」

授業中ということを忘れて反射的に振り向きながら恵に怒鳴った。いつもなら芯はしまって小突いてくるのに今日は思いっきり出てるようだ。

背中にチクつとした痛みがまだ残ってる。しかもなんか一か所じやなく全体的にチクチクしてるんだけど……
というか、背中に刺さったってことは……

「ワイシャツ貫通してるじゃねーか!! 恵、なんで今日は芯」

しまっていないんだよ、と俺が続けようとしたら恵に

「(前!前!)」

とジェスチャー付き口ぱくで伝えてきた。

なんだろう? と思い、その仕草が馬鹿みたいだなーと場違いなことを考えながら前を向くと

「モンスターがいた」

モンスターがいた。なぜか青筋をたててるし。後ろで恵が「思ったこと口に出しちゃってるし…」とか言ってるが何の事だかわからない。

このモンスターは分類では人間で、国語教師の通称『体育』。

文系の教師のくせに筋骨隆々で見た目は完全に体育会系。

ちなみに中身も体育会系。

怒らせるとかなり怖いと評判の先生だ。

ちなみに顔も怖い。

ここまで考えて―めっちゃくちゃ失礼なことを―やつと理解した。

このクラスが異様に静かで、恵が俺に何を伝えたかったのかを。

そこまでわかって嫌な汗がだらだら出てきた…。

そしてモンスターが動きを見せようとした時、

「殺さないで下さい!!」

おもいっきり叫んだ。命がかかっているんだ。恥がどうのこうの言
ってられない。

しかし後ろのほうで笑ってるやつはちゃんとあとで制裁しよう。
俺が生きていればだが…

「誰が殺すか！お前は俺をなんだと思っているんだ！」

「えっと…。やさしい国語教師だと思っています」

「さっきモンスターって言うておいて、よくそんなことが言えるな
！」

「心を読まれていた！？」

「口に出して言ってたわ！…まあいい。何か言い訳とかはあるか？
一応あるなら聞いてやろう。」

「なぜ体育の教師にならなかったんですか？」

「余計な御世話だ！廊下に立ってろ！！」

笑い声が聞こえる中、すごすごと廊下に出ていく俺。
廊下に立ってるだけにどんな意味があるのかを誰かに聞いたかった
が、そんな仲間は授業中の廊下には誰もいなかった。

ただ立っているだけの、暇な間少し考える。

俺が通ってるこの学園は『私立国際学園高等部』。

国際とつくだけあって、二年生のクラスには毎年五月の中頃から留
学生が来る。

どのクラスに来るのかはわからないが、面白いやつだとうれしい。
ちなみにクラスは2－B。A～Eまでクラスがあり、一クラス40
人程度の普通規模の学園だ。

また、すぐ近くに『私立国際学園中等部』があり、俺は一昨年までそこに通っていた。

ちなみに中学には現在俺の妹が通っている。

きつと再来年には妹もこの高校に上がってくるだろう。

高等部には受験なしで来れるありがたいシステムがあったので、中学からの顔見知りもかなり多い。

もちろん外部から受験してくる生徒もいる。そういう生徒はやはり、留学制度などに興味があるのだろうか。

ちなみに俺は留学なんぞに興味はない。ここに来たのも受験なしという甘美な響きに誘われたからだ。

しかしそんな俺でも今ではこの学園をかなり気に入ってる。

というのも、不良がないからだ。

不真面目な生徒はいるが、不良はいない。

ちなみに今住んでるこの町自体治安がかなり良い。

そんな環境を俺はかなり気に入っている。

荒波立てず、平穏でそれなりに楽しい生活ができてる今を大切にしたいと思っている。

これからも仲の良い友達と、楽しい時間を過ごしたい。

キーンコーンカーンコーン…

チャイムが学校中に鳴り響く。

授業が終わり、廊下にもいろいろなクラスの活動音が聞こえてくる。俺はさっそくいつものメンバーに混ざるために、教室に入ろうとしたが

またもやモンスターに出くわした。

よく考えれば当然だ。

モンスターに追い出され、教卓側のドアから入ろうとすればモンス

ターに会うのは必然だった。

しかし、さっきまで悦に入って自分の考えに浸っていたのですっかり忘れていたのだ。

「大藤、これから一緒に昼休みを過ごそうか。反省文ならおごってやるから」

「ありがとうございます。けど遠慮し」

「遠慮なんかするな。」

「いえ、遠慮」

「するな」

「はい…」

強制だった。笑顔が不気味すぎて怖かった。

こうして俺は昼休みを失ってまでモンスターと過ごすことになってしまった。

教室からニヤニヤと見てくる悪友らを恨めしく思いながら、反省文を食べに行くのだった。

「肉じゃが」(前書き)

本編とはまったく関係ないです。

あらすじにショートストーリーもあり、と書きましたがこれがそうです。

以後も今回と同じように、サブタイトルに関連する話をショートストーリーとして

投稿するつもりです。

ちなみになぜ肉じゃがかと言いますと、作者が実際に知人と肉じゃがについて

話していたからです。毎回ショートストーリーのサブタイトルはこんな感じで

決まりますので、深い意味などはないのであしからず。

何度も言いますが、本編とはまったく関係ありません。

「肉じゃが」

功「恵よ。肉じゃがの『じゃが』って何か知っているか？」

恵「じゃがいものことでしょ？」

功「そうだ」

恵「なんかすごい偉そうにしゃべるね？」

功「意味はまったくないがな」

恵「じゃあやめようよ…」

功「あれ、恵には不評だったか？」

恵「うん、なんかイラっとしちやっただけ」

功「そ、そうか…。笑顔がなんか怖いんだが…」

恵「そんなことないよー。っていうか、すでに誰かに試したの？」

功「ああ、美香にな。あいつはすごい喜んでくれたんだけどなー」

恵「あー美香ちゃんにか。なるほどねー」

功「なにがなるほどなんだ？」

恵「美香ちゃんブラコンだから、功くんのやることなすことなんで

も嬉しいんだよ」

功「さすがにそれはないと思うけどなあ。けどよく考えたら喜ぶつても確かにおかしいな」

恵「でしょ？まあそれはいいとしてさー」

功「うん？」

恵「結局なんだったのかなーと思って」

功「?？」

恵「そんな本気でわからないって顔されても困るんだけどなー」

功「ああ！なんであんな偉そうにしていたのかってことか？」

恵「違うよ！肉じゃがの話！」

功「ああ…そんな話もあったな」

恵「なんでそんな昔のここのように…」

功「いやーさっきの恵の顔が般若みたいー」

恵「ニコっ♪」

功「なんてことはなくただ俺が忘れただけでしたごめんなさい！」

恵「もう。で、肉じゃがの話は結局なんだったの？」

功「あーうん。今日食べたいなあと思ったただけなんだけど」

恵「それだけ!？」

功「恵よ。肉じゃがが食べたいぞ」

恵「もういいよそのキャラは!!」

功「ふふふ。ふははははははは！」

恵「ニコっ♪」

功「クレープはいかがですか、姫様」

恵「態度変わりすぎだよ!そんな怯えなくても…」

功「冗談だよ。すいません、イチゴクリーム味のクレープ一つください」

恵「いいの!？」

功「今日だけな」

恵「ありがとうー!」

店員A「やっといきましたね…」

店員B「ええ。クレープ屋の前で肉じゃがの話を始めた時はびっくりしたわ…」

店員A「しまいにはコントみたいなこと始めちゃったしね…」

店員B「けどとっても仲よさそうなカップルだったわね…」

店員A「羨ましいわ…」

店員B「ホントにね…」

店員A & B「はあ…」

この日、功と恵の何気ないやり取りで二人のクレープ屋店員が憂鬱にさせられたのだった。

「肉じゃが」(後書き)

結局肉じゃが関係なかったというオチでした。

もはやサブタイトルの意味がない気もありますが、あまり気にしないでください。

「サントクロース」(前書き)

本編がまだ進んでないのでキャラが二人しか使えないという不便極まりない状況です。

「サンタクロース」

功「サンタって無駄な労力を使ってると思わないか？」

恵「唐突に話し出したねー」

功「まあ付き合ってくれよ」

恵「いいよー。で、一体サンタのどのへんが無駄だと思うの？」

功「まず服装かな。煙突よじ登ったりするにはあのもこもこした服はよくないだろ」

恵「うーん確かに。けど動きやすい服装にした場合、煙突よじ登ったりしてるところを見られたらそれはただの変質者に見えないかな？」

功「そうだな。けどその問題は簡単に解決できる」

恵「そうなの？結構難しい問題に思えるけど」

功「サンタって子供に欲しいものを的確に与えるだろ？つまり、それぞれの住所を特定できるすべを持っていることになる。だから郵送すればいいんだよ！そしたら誰にも姿は見られない！」

恵「なんでそんなに興奮してるの？」

功「むしろ現金書留でいいよ！現金なら自由度が高いし、万が一欲しいものが直前に代わっても対応できる！」

恵「それは夢がなさすぎるよ!!」

功「しかもあいつはトナカイがいなければただのオッサンだしな！
飛んでいるのはトナカイであってあいつはそりに座ってるだけだからな！感謝しろよトナカイに！」

恵「だからどうしたの！？サンタに恨みでもあるの！？」

功「しかしなるほど。ここまで考えてわかったけどあえて動きづらい服装をし、現金ではなく物を送り、トナカイを操り移動するのはすべて演出だったのか。まったく、サンタも中々粋なオヤジだな！」

恵「もうついていけないよ！」

#2 いつもの風景。2（前書き）

閲覧どうもありがとうございます。

何話か書きためてはいるんですが、中々作品の中の一日が終わらなくて困っています。予定ではこの回で一日が終わるはずだったんですが…。

楽しんでいただければ嬉しいです。

#2 いつもの風景。2

反省文も無事終わり、午後の授業も終わった放課後。

何をするでもなく、帰るわけでもなく、何となく集まっている3人の影。

一人は俺、大藤功だ。

一人はこの中唯一の女子で親友の、伊藤恵。後ろの席でニコニコして椅子を傾けて遊んでいる。

どうでもいいけどかなりあぶなっかしい。そして楽しいのかそれ？そして最後の一人、黒川悟は馬鹿代表だ。

「黒川悟は馬鹿」

「急に罵倒すんのやめてくれよ!?!」

「黒川悟はオタク」

「否定はしないけど改めて言われるとムカつく!」

「黒川悟はブサイク♪」

「女子に言われるとマジで傷つくよ!?!つか伊藤も功に乗るなよ!」

「黒川悟は」

「もういいでしょ!?!そんなに俺の心を傷つけて楽しい!?!」

「「全然?」」

「じゃあやめてよ！なんで無駄にそんなことすんだよ！？」

「「暇だから」」

「僕たちホントに友達なのかな…？」

「「…」」

「黙らないでよ！…まったく、功と伊藤がそろうと手に負えないよ。前だって…」

悟は愚痴をこぼすようにぼそぼそ何か言い始めた。

こんなときの悟は中々戻ってこない。さすがにやりすぎたかな？
どうにも恵といると悪ノリしてしまう傾向があるなーと自己分析している、

「昼はお疲れさまだったねえ」

と恵に気の抜けるような声で話しかけられた。

「まったくだ。それにしてもちっとも助けくれなかったな？」

少し責めるような眼をして言ってみる。

「だって功くんってば全然起きないんだもん」

全然気にせず、そしてなぜか若干悲しそうな顔で言ってくる。
というか起こそうとしてくれてたのか…。悪いことしたなあ。

「そっか。ごめんな？お詫びに帰りになんか奢ってやるよ」

「ホントに！？じゃあじゃあクレープとアイスとハンバーガーと」

どんどん出てくる食べ物の名前。恵は小柄だがよく食べるのだ。

「つかその小さい体のどこにそんなに入るんだよ、と疑問に思わざるを得ない。」

「ポテトにジュースでしょ？あとは――」

「太るぞ？」

恵がさらに何か言おうとしたところで、女子に効果抜群な言葉を浴びせる。

恵はよく食べるが、別に食べても太らないわけではないのだ。

「うゝ…」

言葉に詰まる恵。そして追い討ちをかける俺。

「だるまみたいになるぞ？せっかくかわいいのに」

「うゝ…え？」

「え？」

「あ、いや…っていうかだるまってひどくない！？」

「あ、ああ。なりたくなかったらどれか一個にしとけて」

恵の何かよくわからない勢いに若干押されつつも、自分の財布のた

めに提案する。

「うゝ、わかったよ。じゃあクレープ」

「りょーかい」

「3個ね」

「結局!？」

3個も食べるの!？

予定外の出費が…。今日は結構金使う予定あるのに大丈夫かな…。
まあもう決まっちゃったので切り替えよう!

きつとどこかでこの分の金が戻ってくると信じて!

と、およそ現実的でない期待を抱いてると

「早くいこーよ!」

と急かされる。

食べ物が絡むと恵は子供っぽくなるなーと苦笑していると手を引っ張られた。

「功くん、おいていくよ?」

「おいていく気ないじゃん!」

めっちゃ力強いよ!?!簡単に引きずられてるよ!?!

「い・い・か・ら!」

「わかったから引っ張んって！」

自らも足を進めると、まだぼそぼそと何か言ってる悟が目に入った。まさかあれからずっと？なんかちよつと怖いし。まあおいてく気もないので声をかける。

「悟、いくぞー」

「だいたい功は中学から…って、え？どこに？」

「だから、クレープ屋」

「いつのまにそんな話に！？」

ちっとも聞いてなかったのかよ。

「さっきの聞いてなかったのか？悟のおごりでクレープ食べるって話」

「聞いてもないし了承もしてないのに決定してんかよ！？」

悟は正当な抗議をしてくるが、とりあえず無視を決め込む。

「行くか」

「無視！？なんか今日冷たくない！？」

そうかな？いつもこんな感じだと思うけど…
しかしよくよく考えたらなんか可哀そうになってきた。

だって俺からだけじゃなく、大抵の人は悟には似たような対応をするんだぜ？

もしかしたらこいつは結構寂しい思いをしてるのかもしれないな…。俺は携帯を一回取り出し、少し操作して時間を確認し机に置いた。

「ごめんな。今日からは俺だけは優しく接してやるから。そうだな、まずは一緒に登校するか？」

「急に何で！？」

唐突に言われた内容に悟は驚嘆していた。恵もなにがなんだかわからないような顔をしている。

「功くん、なんで悟なんか優しくするの？」

恵は相当ひどいことを言っているが、今はそんなことはどうでもいい。

「こいつはきつと優しさに飢えてると思うんだ」

「優しさ？」

恵は頭に？マークを浮かべてる。

しかし、俺が一瞬だけ目線を置いた携帯に移すと恵は「ぷっ」と笑い、頷いた。

「俺らは悟に対して自然に冷たい態度を取ったりしてることに気づいたんだ。しかしこれからもそれが続くと悟が耐えられるかどうかわからないじゃないか」

「え？ いや僕は別に…」

「もういいんだよ、悟」

俺は朗らかに笑いかける。

すると恵も俺に合わせて優しい口調で話しかける。

「そっか、そうだね。今までごめんね？ これからはもういいじったり冷たい態度とか取らないからね？」

「俺もだ。今まで気づけなくてごめんな？ 他のみんなにも言うっておくからさ」

俺と恵は今きつと爽やかな笑顔を悟に向けているだろう。

「い、いや遠慮しておくよ。僕は今まで通りでも大丈夫だからさ」

拒む悟を恵と二人で畳み掛ける。

「お前が心配なんだ、悟」

「そうだよ？ 今日からはもう何も心配しないでね」

「だからっ！！！」

悟が大声で何か言おうとしている。

やっとか、と思ひ恵を見ると、すでにちよつと笑っていた。

「僕は優しくされたいわけじゃないからっ！！ むしろ功からは優しくされるより冷たくされる方が嬉しいよ！！」

悟の思いは教室中に響いた。

きっと今こいつは自分が言ったことをちゃんと理解していないだろう。

俺は携帯を手に取り、操作しながら悟に言った。

「そうだったのか…。全然気が付けなくてごめんな？」

「わかってくれればそれで―」

いいんだ、とおそらく悟がそう続けようとしたところで、ピツという無機質な機械音が聞こえた。

俺の携帯から。

そして数秒後に先ほどの再現がなされた。

『むしろ功からは優しくされるより冷たくされる方が嬉しいよ!!』

……。

恐ろしいくらいの静寂が教室を覆った。

「知らなかったよ。お前、ホントにMだったんだな」

「今まで功くんに苛められて喜んでたんだね？うわあ…」

軽蔑の視線をダブルで浴びせる。

「違う！今のは違うから！」

「……………」

「……………」

「そんな目で見ないでくれ！」

「興奮するのか？」

「しないよ！って伊藤も本気で引かないですよ！」

「だってえ…。MでBLって…」

「勝手にBL追加しないでよ！」

「恵、いじめても喜ばすだけだぞ」

「もういいよ！帰る！今日は帰るから！」

そう言ってホントに帰ろうとする悟。
さすがにちよっとやりすぎたかな？

「悟！ちょっと待て！」

「…」

悟は無言で振り返る。

やはりやりすぎたのか、若干目に涙が浮かんでいる。

俺はそんな悟にやさしく言った。

「悪い。帰るならクレープ代だけ置いてってくれないか？」

たっぷり三秒後。

「もうやだあああああ！」

悟は猛ダッシュで帰って行った。

「さて、クレープ食いにいくかー」

「功くん、鬼だねえ」

そんな恵の呟きを背に受けつつ、教室を出るのだった。

「トイレ」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

ショートストーリーは何も考えずに書けるので投稿頻度は高くなっています。

ただ内容はどうでもいいことしか書いてないです。

「トイレ」

悟「どこ行ってたの？」

功「ちよつとな」

悟「トイレでしょ」

功「なんで知ってる？ ストーカーか？」

悟「なんで真っ先にその疑いを持つかな！？」

功「いやだって、なあ？」

悟「その「しょうがないじゃん？」みたいな顔やめろ！ Yシャツが出てたからわかったただだよ！」

功「あーホントだ。気付かなかったわ」

悟「しまわないと怒られるよ」

功「そうだな。ところでなんでうちの学園ってウォシュレットがあるところとないところがあるんだ？」

悟「確かに二階のトイレにはほとんどないね」

功「職員室前のトイレにはあるよな。あれは羨ましい」

悟「僕はウォシュレット使わないから別にいいかな」

功「なんで使わないんだよ!？」

悟「なんで怒ってるかわからないけど、あれってくすぐったいから好きじゃないんだよね」

功「いやむしろ気持ちいいだろ」

悟「いやいやお尻に水を直接かけられて気持ちいいとか考えられないよ」

功「そうやって改めて言われると変態っぽいけどな、あれはやっぱり気持ちいいよ」

悟「見解の相違があるみたいだね？」

功「俺は譲れない。お尻がきれいになって気持ちいいなんて一石二鳥だろ!」

悟「あれは気持ち良くないね!くすぐったくて我慢できないよ!」

恵「…」

功「恵!いいところにいた!ちょっと聞きたいことが—」

恵「男の子二人で…お、お尻が気持ちいいとか我慢できないとか…やっぱりそういう関係なの?」

悟「ちちちがうよ!」

功「どもるな！信憑性が薄まるだろ！あと恵やっぱりってなんだよ！？」

恵「大丈夫だよ！私は！ギリギリ許容範囲だからぁー！！！！！」

功「そんなこと聞いてない！！ってちょっと待て！話聞いてくれ！お願いだから待ってー！！！！！」

「トイレ」(後書き)

自分でも何書いてるんだろうと思います。

「電話」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

「電話」

功「すごい話してもいいか？」

恵「いいよー」

悟「いいけど、なんか漠然としてるね？」

功「聞けばわかる」

悟「ならいいけど。で、どんな話なの？」

功「ああ。これは前にうちに電話がかかってきたときのことなんだが」

以下回想（電話相手はA表記）

功「もしもし大藤ですけど」

A「こちら〇〇会社のAと申します。お父様かお母様はいらっしゃいますでしょうか？」

功「すみません。どちらも今いないので自分が用件を伝えておきましようか？」

A「ありがとうございます。それではメモなどを用意していただいてもいいでしょうか？」

功「わかりました。ちょっと待っててください。」

A「はい」

功「メモはくつと。あつたあつた。もしもし？」

A「……………」

功「あれ？もしもし？…ん？電話越しに何か聞こえるな」

A「…………だから私じゃないんですって！それと今電話中なんでちょっと待っててください！」

？「…………お前以外に誰がいるんだ！だいたい上司との話途中に電話なんかしてるな！」

A「…………お客様への電話なんですから待っててください！」

？「…………ちよつと電話かせ！」

A「…………っあちよつと！」

？「申し訳ありません。今忙しいので電話切らせていただきます！」

功「え？あの…今そちらから電話かかってきたんですが用件だけでも——」

ガチャッ。ツーツーツー…

美香「あれ？おにーちゃん子機握って何してんのー？」

功「いや、何もできなかったんだよ…」

美香「へ？」

功「気にするな。それより何か用か？」

美香「うん！今日もお兄ちゃんとお風呂入ろうと思って！」

功「いつも一緒に入ってるみたいに言っても駄目だからな？」

美香「ちえー。じゃあ早くキスして？」

功「どういうこと！？じゃあの意味が全くわからない！」

美香「兄は妹にキスしなきゃいけないんだよ！」

功「そんな決まりは絶対ない！全く、冗談もほどほどにしろよ？」

美香「はーい。まあ、私たちいつも寝てる間にキスしてるもんね？」

功「それは夢でってことか？それとも俺が寝てる間ってことか！？
ってか冗談だよな！？」

美香「キスしてくれたら教える！」

功「本末転倒じゃねえか！」

以上回想終了

功「ってことがあってな」

恵「たしかにすごいねー」

悟「うん。そんなことがあったんだ…」

功「さすがにびっくりしたよ」

恵「私もー。まさかねえー」

悟「ああ、まさかなあ…」

恵&悟「功（くん）がそんなにシスコンだったなんて…」

功「そっち！？電話の話がメインなんだけど！しかもシスコンじゃないし！」

恵「いやあ電話の話も驚くけどさ、仲良いのは知ってたけど兄妹ですごいことしてるんだなーと思ってさー」

悟「インパクトが強すぎて電話の話が大したことじゃなく思えるな」

功「そんなにか？美香がいつもあんな感じってことは知ってるだろ？」

恵「キスまで進んでるってことは知らなかったなー」

功「それは美香の冗談だって！………多分」

悟「うちの妹じゃ天地がひっくりかえってもあり得ないよ。ただでさえ会話があんまりないのに」

功「それはお前が奈央ちゃんに嫌われているだけだ！」

悟「うっ。そんな直接言わなくても…」

恵「黒川が奈央ちゃんに嫌われているのは周知の事実でしょー？」

悟「ひどいや…」

恵「功くんもシスコンなのはわかるけどもう少し節度を持って生活しなきゃ！」

功「違うっつってんだろ！どう考えてもおかしいのは美香だろう！？」

恵「けど時々断りきれなくて一緒に寝てるんでしょー？」

功「それは…ってなんで知ってたんだよ！？」

恵「美香ちゃんが言ってたよー」

功「あいつが俺のシスコン疑惑の原因か！」

恵「疑惑じゃなくて事実でしょー」

悟「妹に好かれてる分他の人から嫌われてよ！」

功「妬むな！嫌に決まってるだろ！」

恵「結論！功はシスコン、黒川は妹に嫌われている兄略して嫌兄！」

功&悟「勝手にしめるな！！」

「電話」(後書き)

電話の話は作者の体験談だったりします。

#3 いつもの風景。3 (前書き)

閲覧ありがとうございます。
全然進まないです。

#3 いつもの風景。3

「いつものところでいいか？」

「いいよー。あそこのクレープおいしいから！」

悟が走り去った後、恵と二人でクレープ屋に向かっていた。

学園から少し歩いたところにある公園に女性に人気のクレープ屋があり、そこに向かっていている途中だ。

「あー！！」

声のほうに顔を向けると、結構遠くに中等部の制服を着た女の子三人組がいた。

そのうちの一人が凄く大きな声で叫びながらこっちに走ってきている。

「おーい！！おにーちゃん！！」

残りも二人も続いて走ってきた。

「ちよ、待ってよ美香！ほら、奈央も行くよ！」

「美香ちゃんも香奈ちゃんも走るの早いよ」

別に走ってこなくてもいいのになあと思に苦笑すると、

仕方ないよーと同じく苦笑している。

仕方ないってなんでだ？

恵に聞いてもはぐらかされ結局わからずじまいだったので釈然としないが、考えてもわからなかった。

それにしてもこの三人組はいつも一緒だなあ。

仲良しで微笑ましいと思うっていると、先頭を突っ走っていた我が妹美香が勢いを殺さずに突進してきている。

「お、おい美香！そろそろ速度落とせて！」

「お兄様兄さん兄者ー！！！！！」

「頭大丈夫か！？」

わけのわからないことを叫びながらもいまだ止まらない妹。そして目の前まで来たかと思うと

「妹ダーク！」

言葉通りにダークしてきた！？

「なんの！兄キャッチ！」

避けると怪我をするかもしれないと思い、キャッチを選択した。しかし、つられて俺もまでテンションがおかしなことになっている。

「さあこい！絶対受け止めグフツ！…やる…ぞ…」

「お兄ちゃんありがとー！さすがお兄ちゃんだね！」

俺に抱きついてご満悦な美香。
妹に抱きつかれてぐったりしている俺。
実に対照的である。

「功くん！？大丈夫！？」

「やっと追いついた！もう美香急になって功先輩！？」

「功さん！？大丈夫ですか！？」

「うふふ…。ふふふふふふ…」

「こわっ！功くんめっちゃ怖いよ！」

恵が何か恐ろしいものでも見たかのような反応をする。

うふふ。一体何に怯えているのかしら？

思考がなぜかオネエになりかけていたが、泣きそうなほど、という
か既に半泣きになっている奈央ちゃんが目に入り一気に覚醒した。

「はっ！！一瞬意識がとんでた気がする…。そして腹がめっちゃくちゃ
痛いんだが…」

「功先輩大丈夫！？さっき急に不気味な笑いを漏らしてたけど」

「ああ、よく覚えてないけど腹以外大丈夫みたいだな。心配してく
れてありがとう香奈ちゃん」

「そりゃ心配もしますよ。ホントにぐったりしてたし。…それに功

先輩のことだし」

「え？」

「なななんでもない！」

急に慌てる香奈ちゃんだが、俺にはさっぱり理由がわからなかった。そして先ほど半泣きしそうになっていた、そしていま今は泣いている奈央ちゃんに顔を向ける。

「奈央ちゃん、泣かないで」

「だって、ひくっ、功さんが…」

「奈央ちゃんは優しいなあ」

いまだに抱きついてる美香を引っぺがし、奈央ちゃんを抱きよせる。騒ぐ妹は無視する。

ちなみにこんな大胆とも思えることをするのは奈央ちゃんは美香ともよく一緒にいるせいかわ妹の様に思えてならないからである。

「ひくっ…」

「ありがとう。けど、奈央ちゃんが泣いてると俺も悲しいよ」

「功さん…。無事でよかったです」

「奈央ちゃん…」

「功さん…」

「（反応が私たちと全然違う…）」

恵と香奈ちゃんが不機嫌そうな視線を向けてきてるが、今は気にならない。

奈央ちゃんの頭を撫でる。奈央ちゃんも嫌がるそぶりもなく受け入れてくれる。

なんて良い子なんだろうか！

「ちょっとちょっとお兄ちゃん！なにしてんの！？」

まだ騒ぐ妹。

「兄が抱き寄せていいのは妹だけなんだよ！」

「はいはい。奈央ちゃんホントにありがとう」

「おざなりっ！？兄は妹を無視しちゃいけないんだよ！」

奈央ちゃんをそっと離すと、少し名残惜しそうな顔をする。
なんてかわいい子なのだろうか！

「こんなに良い子でかわいいのになんで…」

「功さん…恥ずかしいです…／＼」

「なんで悟の妹なんだ！」

そう、奈央ちゃんは悟の妹。

間違うことなく悟の妹。黒川奈央。

「なんで俺の妹じゃないんだ！」

「お兄ちゃん！？さすがにそれは冗談でも傷つくよ！」

「大丈夫だ美香。もちろんお前が」

「お兄ちゃん／＼」

「二番目に良い妹だぞ！」

「一番目は誰…？美香、ちょっとオハナシシテクルヨ…？」

最後が片言になり、不気味な雰囲気美香のまわりに漂い始める。

「功くん、そろそろまずくない？なんか怖いんだけど…」

「美香が人間じゃなくなる前になんとかしてください！」

「（コクコクッ！）」

確かに口からおよそ呼吸とも思えないような変な音が聞こえてくる。
さすがに冗談が過ぎたか？

「冗談だ、一番は美香に決まってるだろ？」

「本当？お兄ちゃん」

「多分」

「ホントウ？オニイチャン」

「本当だ、天地神明に誓ってもいい」

「私もだよお兄ちゃん！」

ふう、一瞬寒気がしたぜ。

「変な冗談なんか言わなきゃいいのにー」

「悪いな。これはもう癖みたいなものだ」

「まあ私は功くんのノリがいいところ好きだけどー」

「俺も恵と話したりするのは好きだな」

本心から思っていることなので、少し恥ずかしかったが素直に口に出せた。

しかし似たようなことを言ってた恵は顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。

「な、なんか恥ずかしくなってきたな」

「そ、そうだね！」

「「「」」」」

中等部の三人からジト目で睨まれる。

もの凄く居心地が悪くなってきた。

「さて、クレープ食いに行くか恵！」

「そうだね功くん！」

大きさにテンションを高くして誤魔化すしかできなかった俺たちだった。

#3 いつもの風景。 3 (後書き)

本当に進まないです。

「好き嫌い」(前書き)

自分は鮎が嫌いです。

「好き嫌い」

功「あー目覚めるわー」

恵「まーたブラックコーヒー飲んでるの？」

美香「お兄ちゃん好きだねー」

功「飲むとスッキリするんだよな」

恵「苦いのにスッキリするかな？」

功「それは慣れの問題じゃないか？」

恵「私はいつまで経っても飲める気がしないよー」

功「恵ちゃんはお子ちゃまですもんねー？」

恵「私はいつまで経っても飲める気がしないよー」

功「こんなもの飲めても飲めなくても変わんないから気にしないでいいさ！」

美香「お兄ちゃん弱っ！」

功「殺されそうなほどのプレッシャーを感じたんだからしょうがないだろ？」

恵「そうなの？（ニコッ）」

功「自分の間違いに気づいたんだよ」

美香「お兄ちゃん…」

恵「ほらー馬鹿なことしてるからさすがの美香ちゃんも失望してー」

美香「弱いお兄ちゃんも良いね!!」

恵「なかった?!」

功「嫌われないのは良いんだけど、素直に喜べないんだよね…」

恵「喜んでたらドン引きだよ…」

美香「なんでよー? 妹に褒められた兄は喜ばないといけないんだよ?」

功「あれは褒められたのか?」

恵「美香ちゃんの兄の定義がすごく気になるよ…」

美香「別に普通だと思うけど」

恵「それはないよー」

功「ああ、ないな」

美香「聞く前に否定しないでよ!」

恵「じゃあたとえばなにかある？」

美香「兄は妹に隠しごとをしてはならない」

功「俺のプライバシーはどこにある！」

美香「大丈夫だよ！お兄ちゃんのことは何でも知ってるから！」

功「すでにないのか？！」

恵「まあさすがにそれはないと思うけど、じゃあ功くんの食べ物の好き嫌いは？」

美香「好きなのはチーズだよ。特に裂けれるチーズを裂かないで食べるのが好きなんだよね」

功「……………」

美香「それで嫌いなものはリンゴときのことウニで、他にもあるけど特にこの3個は苦手みたい。リンゴは気がついたら嫌いになってたけどリンゴジュースは飲めるって変だよな？きのこは味が徹底的に嫌いで、ウニは前プリンに醤油をかけたような味って聞いてから苦手になったんだよ！」

恵「…すごい詳しいけどあってるの？」

功「…全部あってる。しかも教えたことないことまで知ってる！！」

美香「言ったじゃん！お兄ちゃんのことならなんでも知ってるって！」

恵「冗談じゃなかったんだね…」

功「冗談であってほしかった…」

恵「それにしてもねえー」

功「恵からもちよっと言ってやってくれよ」

恵「裂けれるチーズは裂きなよ？」

功「それはほっとけよ!!」

「好き嫌い」(後書き)

ツナ缶は好きなんですが。

「あいうえお作文」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

年明けに中古店でWii＋過去発売済みのWii専用ソフト全てが入った福袋があると友人に聞きました。
値段は99万円だそうです。

「あいうえお作文」

恵「きゃっ！地震！？」

功「結構でかいな！」

悟「まだ揺れてるよ！」

恵「…おさまったかな？びっくりしたー」

悟「携帯の速報で今の震度4だって書いてあるよ」

功「今ので震度4か。もし震度30とかだったらどのくらい揺れるんだ？」

悟「それは地球滅亡レベルだよ！」

功「けど実際もっと強い揺れが来たら相当慌てるだろうな」

恵「そうだよねー。「おすし」とか気にしてる余裕ないよねー」

悟「おすし？」

功「おさない すばやく しずかになってやつだな」

悟「ああ！僕が知ってるのは「おかし」だったからわかんなかった

よ」

功「結構いろんなのがあるみたいだからな。けど意味はだいたい一緒だろ」

恵「そういうのってあいいうえお作文っていうんだよねー」

功「よく自分の名前で作ったりするよな」

恵「そう？私はやったことないなー」

悟「僕もないね」

功「マジで！？一度は通る道じゃないのか？！」

悟「そんな大げさに驚かなくても…」

恵「じゃあそういう功くんは作ったことあるんだ？」

功「何回かあるぞ」

恵「どんなのどんなのー？」

功「『こ』これが『う』運命」

悟「無駄にかっこいい！！」

功「『こ』恋と『う』裏切り」

恵「なんか昼ドラのテーマみたいだねー」

功「こんな感じだな。二文字だから作りやすいんだよ」

悟「なんか想像してたのと違ったよ…」

恵「三文字だと難しいかなー？」

功「いや、すぐ作れるんじゃないか？」

恵「ホントー？じゃあ私の名前で作ってみて！」

功「『め』めちゃくちゃ 『ぐ』ぐりぐり 『み』耳の中」

恵「そんなことしないよ?! イメージ悪すぎでしょ!」

功「じゃあもっといいのを」

恵「普通をお願いね？」

功「『め』女神が 『ぐ』具現化した 『み』みたい」

恵「それは大げさすぎでしょ!」

功「最初のよりはいいだろ？」

恵「それはそうだけど…。普通に恥ずかしいよー」

功「じゃあ次はー」

恵「ちょっと待って! 次は黒川に作ってあげてよ!」

悟「え、っ？ 僕はいいよ！」

恵「遠慮しないで作ってもらいなよー！」

悟「絶対に中傷するような内容だから嫌だ！」

功「大丈夫だ。今回はまじめに作るから！」

悟「本当かなあ…。っていうかなんでそんなにやる気なの？」

功「なんか楽しくなってきただけだから気にすんな」

恵「功くんは時々よく分かんないところでやる気だすよねー」

悟「普段はあんまり出さないのにね…」

功「よし！できたぞ！」

恵「ではどうぞー！」

功「『さ』 昨晚 『と』 トイレで 『る』 ルールルル♪」

悟「中傷はされてないけどイメージは最悪だよ！！！」

恵「うわあー…」

悟「伊藤も引かないでよ！ 功が勝手にいつてるだけだよ？！」

功「不満か？」

悟「満足するはずないでしょ！」

功「しょうがないな。じゃあもう一個考えてやるよ。まったく…」

悟「え？なんで僕が譲歩されたみたいになってるの？」

功「できたぞ！」

悟「はやっ！！絶対ろくなのじゃないでしょ！」

功「『さ』最近 『と』父さんと 『る』ルールルル♪」

悟「やっぱり！！しかもさっきよりもひどいじゃん！！」

恵「……………」

悟「そんな目で見ないで！僕も父さんも至って健全だから！」

功「家族の在り方っていろいろあるんだなあ」

悟「そうかもしれないけど僕の家は違うよ！？ってか元凶がなに言ってるのさ！」

功「なんだよ？まだ不満か？」

悟「むしろさっきよりも不満が増えたよ！」

功「しょうがないなあ。じゃあもう一個だけ——」

悟「遠慮するよ!!」

「あいうえお作文」(後書き)

定価を考えれば安いですが、99万円は高いですよね。
安いのに高いっていうのもおかしいですが。

#4 いつもの風景。4 (前書き)

閲覧ありがとうございます。

三連休だということを今日知りました。

#4 いつもの風景。4

結局五人でクレープ屋に向かうことになった。

中等部の三人と背が小さい同級生一人で。

見ようによっては年下を侍らせてるように見えるんじゃないだろうか
…。

「…」

何気なく少しだけ歩く速度を遅め、四人が前に行くように調節する。
ちよつと被害妄想がすぎるかも知れないかとも思ったが、どこで誰
に見られてるかわからないからな！

「お兄ちゃん？ どうして後ろ行くの？」

「功くんはまわりの目が気になるんだよー」

「男の人は功先輩だけだもんね」

「しかも年下の子ばっかだからねー。ロリコンに見えるかもねー」

「…」

一瞬で、しかも完璧にばれていた。

恵たちの洞察力に戦慄する。

「そういえば今日はうちの兄は一緒じゃないんですか？」

と、奈央ちゃんが今さらな質問をしてきた。

ちなみに、この中で兄がいるのは美香と奈央ちゃんの二人のみ。香奈ちゃんには姉が一人いる。

美香は俺のことをお兄ちゃんと呼び、奈央ちゃんは悟のことを……えっと、なんて呼んでたかな？

俺たちの前では「うちの兄」とかだが、よくよく考えてみれば悟と奈央ちゃんが話しているのはあんまり見た覚えがない。

…ホントに面白いそうだな。

「功さん？ どうかしましたか？」

「ん？ ちょっと哀れな友人にエールを送ってたんだ」

「？」

「それより最初に戻るけど悟は今日は帰ったよ」

「珍しいね！ お兄ちゃんと悟さんってよく一緒にいるのに」

「ああ、ちょっと色々あってな」

「そうだねー」

俺が苦笑するのに合わせて、恵も苦笑する。

「恵がドSぶりを発揮してな。悟におまえはMだ！とか、BLだ！とか罵ってたら帰ってた」

「ちょちょっと！ 真実がねじ曲がってるんだけど！？」

「恵先輩ってドSだったの！？人は見かけによらないってホントだったんだ…」

「香奈ちゃん信じてるの！？っていうか声でかいよ！」

「お兄ちゃんをMにはさせないからね恵ちゃん！」

「だから違うってば！！功くん誤解といってよ！」

「はっはっはっはぶっ！！！！！」

「功くん♪誤解といってくれるよね…？」

高みの見物をしているかのごとく笑っていたら横腹に強烈なパンチが飛んできた！

今日は腹に強打が入りすぎな気がする。

パンチを打ってきたほうを見ると、笑顔でこちらを見つめている恵さん。

怒ると笑顔になる恵だが、これが結構怖かったりする。

普通に怒られるより、笑顔で怒られるほうが怖いことってあるよね？

「すいませんでした女王様…。はっ！迫力につられて思わず言っしまゴフッ！！」

「ふふふ。功くんも懲りないねえー♪」

「はい…。すいませんでした…」

「まったく！もうやめてよね」

二人とも冗談でやっていることはわかりきっていたので、あっさり許してくれる。
その一方で…

「」「ドS女王様…」

三人組は若干ビビっていた。

#4 いつもの風景。4（後書き）

短めですいません。

もっとキャラ数を減らせばよかったかなと後悔します。

「差」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

「差」

功「へー。それでどうなんだ？」

悟「えっと最後はー」

功「あ、あれ奈央ちゃんじゃないか？」

悟「え？ホントだ」

功「よく本屋で会うけどよっぽど本が好きなんだなー」

悟「本屋で会ったことあったんだ？」

功「ああ。奈央ちゃんから聞いてないのか？」

悟「…奈央とはあんまり会話がないからね…」

功「それは悪いことを聞いたな…」

悟「いや、大丈夫だよ…。慣れてるから…」

功「それにしても奈央ちゃん良い子なのになんで悟は嫌われてるんだ？」

悟「それは僕が聞きたいくらいだよ」

功「今度聞いてみるか」

悟「やめて！そんな残酷なことは！」

奈央「…ん？あ、功さん！」

功「こんにちは奈央ちゃん」

奈央「こんにちは！功さんも何か本探しているんですか？」

功「いや、今日は悟に付き合ってここまで来たんだ」

悟「よ、よう」

奈央「また漫画買いに来たの…？」

悟「え、まあそうだけど…」

奈央「たまには小説とか読まないの？いつまで経っても漫画ばかりだし」

悟「僕も小説くらい読むよ。ラノベだけど」

奈央「…」

悟「別にいいじゃないか！功だって漫画もラノベも読むよな！？」

功「まあ悟ほどじゃないけど一応な」

奈央「そうなんですか？今度功さんのお勧め教えてください」

悟「僕とは天地の差がある反応だね！？」

奈央「功さんは一般小説も読むからいいんです」

功「じゃあ何か考えておくよ」

奈央「ありがとうございます！」

功「そういえばこの間奈央ちゃんに借りた本すごいよかったよ」

奈央「良かった！あれ私もすごい感動したから誰かに紹介したかったんです！」

功「それでなんだけど、美香も読みたいって言うから貸しちゃったんだけど大丈夫かな？」

奈央「美香ちゃんなら全然大丈夫ですよ」

功「ありがとう。奈央ちゃんはやっぱり優しいね」

奈央「そそそんなことないですよ！」

悟「そうだね。僕には優しくないからね」

功「そうか？照れてるだけだろ？」

悟「そうだったらどれだけいいことか…」

奈央「あ！そういえば功さんの好きな探偵シリーズの最新刊買いましたか？」

功「もう出てたのか！」

奈央「あっちのコーナーにありましたよ？」

功「ちょっと見てきていいかな!？」

奈央「わ、私も一緒にいってもいいですか？」

功「もちろん。教えてくれてありがとう」

悟「あの、僕はどうー」

功「あ、悟は自由に見てきていいぞ」

悟「あ、そう？」

功「ああ。じゃ」

悟「……………」

T「おっ、黒川じゃん。なにボケっとしてんだ？」

悟「ちょっと仲間外れにされてね…」

S「なるほど。また大藤と伊藤か？」

悟「いや、功と妹にね…」

T「黒川の妹って確か中等部だっけ？」

S「俺大藤がすごく良い子だって言ってたの聞いたぜ？」

T「それは俺も聞いたことあるな」

悟「功にとっては良い子なのかもね…」

T「どういうことだ？」

悟「僕は嫌われてるみたいでさ。なんかもう功が本当の兄みたいに感じるくらいだよ。ははっ」

S「自嘲するなよ。さすがに思いつめすぎだって！」

悟「あれを見てもそんなことが言えるかな…？」

T「…すごい仲良さそうだな」

S「…確かに大藤が兄に見える」

悟「なんでこんなに差があるんだろう？」

T「すまない…。全くわからん」

S「それにしても、黒川は妹にまで――」

悟「それ以上言わないで！きっと精神が耐えられないから！」

S「あ、ああ。すまない」

T「そ、そうだ！今日は俺たちと一緒に遊ぶか！？」

S「それがいいな！黒川がいればきつと楽しさ二倍だぜ！」

悟「あ、ありがとう…。嬉しいよ…」

T「じゃあいくか！」

この日以来、TとSはとても優しくなったという。

「差」(後書き)

オチをどうつけるか考えてたら、終わってしまいました。
やっぱり先に考えておかないと駄目ですね。
この回は忘れてもらっても構わないです。

「パンツ」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

「パンツ」

功「男子って小さい頃はブリーフ履いてたよな？」

悟「僕はそうだったね」

功「俺も10才くらいまではブリーフ履いてたな」

恵「……………」

悟「けどだんだん柄パン派が増えてきて、ブリーフが途端に恥ずかしくなってくるんだよね」

功「そうそう。「え、お前まだブリーフ履いてるの（笑）」みたいに言われるんだよな」

悟「今にしてみれば大したことじゃないけど、その当時はそれが言われるのが嫌だったなあ」

功「それで、気が付いてみれば皆柄パンを履いてたみたいだね」

悟「ちなみに僕は今でも柄パン履いてるよ。楽なんだよね」

功「ブリーフはなんか窮屈だよな？その点柄パンは解放感があるというか」

恵「……………」

悟「功はどうなの？」

功「俺はいまはボクサーパンツだ」

悟「そうだったんだ。僕は履いたことないけどあれも窮屈そうに見える」

功「いやいや。伸縮性があるからそれは大丈夫だ。しかもかなり動きやすい」

悟「へー今度試してみようかな」

功「それがいい。ボクサーパンツはお勧めできるぞ」

恵「……………」

悟「けどブリーフって大人になってまた履いてるイメージがあるんだよね」

功「それはわかるな。父親ってブリーフ履いてる感じがする」

悟「実際うちの父さんもブリーフだしね」

功「その原点にかえる理由はなんなんだろうか？」

悟「うーん。わかんないけど僕たちもいつかまたブリーフを履くことがあるかもね」

功「そうだな。まあまだ先のことだとは思うけどな」

悟「で、ボクサーパンツはどこで買ったらいいかな？」

功「どこでもいいんじゃないか？俺もメーカーにこだわってるわけじゃないし」

悟「そっか。じゃあ駅前のあるところで買おうかな」

功「ああ、俺もそこで買ったよ」

恵「…………あのー。すっごく話に入りづらいんだけど…」

功「あーすまん。なんか盛り上がっちゃって」

悟「そうだね。ごめんごめん」

恵「まあいいけどー。私も話にいれてよー」

功「わかったよ。じゃあ恵は今どんなパンツ履いてるんだ？」

恵「それはセクハラだよ！？もっと違う話に入れて！！」

功「じゃあ恵はどこでパンツ買ってるんだ？」

恵「それもセクハラ！！パンツから離れた話題にしてよ！！」

功「いやだって話に入りたいて言うからパンツについて話したいのかと」

恵「違うよ！パンツはもういいから！」

功「じゃあブラジャーについて」

恵「もうセクハラしたいだけでしょ！？しかもそれについて話せるの私だけだし！！」

功「悟も話せるぞ？前つけてたもんな？」

悟「そんなわけないでしょ！？完全に変態じゃん！っていうか僕をオチに使わないでよ！」

功「このままだと俺がセクハラばっかしてるみたいになると思っ
な」

悟「保身のために友達を売ったの！？」

功「自分の身は自分で守らないとな」

悟「最低だ！！」

恵「二人で言い争ってるけど、一番の被害者は私だよね…？」

「パンツ」(後書き)

10分で書けました。
それがなぜか空しいです。

#5 いつもの風景。5 (前書き)

閲覧ありがとうございます。

すっかり忘れていて七草粥を今日食べました。

#5 いつもの風景。5

所変わって現在、マイホーム。
大藤家である。

夕食後、居間でテレビを見ながら家族が集まっているいつもの光景があった。

しかし今日は疲れたなー

結局あのあと、恵にクレープを奢り（三個）せっかくだからと美香、香奈ちゃん、奈央ちゃんにも一個ずつ奢った。
べ、べつに見栄張ったわけじゃないぞ！

「お兄ちゃんは誰に言ってるの？」

「心を読むのはやめろ」

ちなみに、クレープ屋まで行くのには学園からゆっくり歩いてても15分もかからない。

はずなんだけど、今日は学園を出てから1時間以上もかかっていた。
まったく、悟や恵、美香はすぐふざけるからどうしようもないな。

「お兄ちゃん、自分の事は棚にあげるんだね」

「妹よ、なぜ兄の考えてることがわかる？」

さっきはスルーしたが、ここらではつきりさせとかないとな！
プライバシーは皆に平等にあるべきだ！

「え？だって兄妹だし当然でしょ？」

だって兄妹だし当然でしょ？
……根拠になってくない？

「…仮にその説明が正しかったとしよう。しかしそうすると俺たちは兄妹じゃなくなるんだが」

「そんなことないよ！だってお兄ちゃんも私の考えてることわかるでしょ？」

「ごめん。全然わからない」

そして、あんまりわかりたくない。

「まじで?! それでも兄なの？」

「…なんで俺がそんな常識外れの人を見るような目で見られてるんだ？」

「けどお兄ちゃんが義兄かあ…。それもいいなあ」

この妹は底が知れないな。

兄としては不安でしようがない。

自分の身も不安でしようがない。

俺、きれいなままで婿に行けるんだろうか…？

「功ちゃん、あんまり心配しなくても大丈夫よ？」

「母さんにも心読まれている!？」

「楽しそうだからやってみたわ」

「そんな軽いノリで?!」

誰でもできるの?!

まさかホントに俺が常識外れなのか?

「美香ちゃんはお兄ちゃんが大好きなだけなんだから。むしろ喜んでいいんじゃないかしら?」

「それはそうだけど…」

「他のご家庭ではあんまりないことらしいわよ?」

「それは身近に例がいるからな…」

確かに喜んでいいのかもしれない。

いや、実際嬉しいと思う気持ちがないわけじゃない。

「ただなあ…。愛が重いんだよな…」

これって恋人に言うセリフじゃないか?

しかもあまり普通じゃない恋人に。

「あらあら。まるで恋人みたいなこというのね?」

「うゝっ…」

思っていたことを母さんにずばり言われてしまった。

あれ?でも今は心を読まれてなかったみたいない方だったな…
ってことはさっきのはホントにノリだけでやってたのか!?

我が母親ながら恐ろしいな…

「兄妹はもはや恋人と同じだよお母さん！」

「美香ちゃんは将来お兄ちゃんのお嫁さんかしらねえ？」

「そうだよ！」

…これ、中2の娘とその母親の会話だって信じられるか？

「あの、兄妹って結婚できないって知ってるか？」

「お兄ちゃん法律なんて信じてるの？」

「あれは信じる信じないってもんじゃないから！」

都市伝説みたいな扱いすんなよ！

「それより美香ちゃん、お風呂沸いたから入ってきたら？」

「はい！覗くなら10分後がお勧めだよ、お兄ちゃん」

「10分後に何かあるのか！？」

「来たらわかるよ！」

ちょっと気になるな…

いや、覗かないよ？

「……」

「……」

一人騒がしい妹がいなくなり途端に静かになる居間。

今、大藤家は3人家族で父親は俺が4歳の頃に病死した。

その頃は3歳違いの美香はまだ1歳だったからあまり覚えてないだろうけど、母さんがひどく憔悴していたのを覚えている。

それが嫌である頃は母さんに元気を出してほしくていろいろしたっけなあ…

「うふふ。ホントにあの頃から功ちゃんは優しくて、お母さんはずっと頼りにしてるのよ？」

「母さん…」

いい話なのにさりげなくまた心読まれてるな…。

「だから美香ちゃんのことでも安心して任せられるのよ」

「それは兄としてでいいのかな？」

「もちろんお婿さんとしてもいいのよ？」

「兄としてまかされます」

うふふ。と笑い冗談を言う母さんだったが、急に真面目な、それでいて少し申し訳なさそうな顔で言った。

「それと…父親としても」

「…」

「ごめんなさい。本当なら美香と3歳しか変わらないあなたに頼むことじゃないんだけど」

「謝ることじゃないよ。それに昔から母さんに頼られるのは好きなんだ」

「ありがとう功ちゃん。美香にあなたがいてくれれば何も心配ないわ」

「それは過大評価が過ぎるよ」

さすがに照れくさくなって、そっぽを向きながらそう答える。

「あらあら、照れなくてもいいのよパパ」

「お願いだから外では呼ばないでくれよ？」

「ついでだから私の夫にもなってもらおうかしら？」

「それはついでで済まされるレベルじゃない！」

だって母と息子だぜ！？

仰天していたら、風呂上がりの美香が小走りで居間に戻ってきた。

「お風呂上がったよー。次はお兄ちゃんが入ってね！私の次に！」

「なんでそんなに強調するんだよ…」

入りにくいじゃねえか！

「あらあら、ご指名よダーリン」

「ダーリンって何！？」

いつの間にか夫にされてる！？

「お母さん！？いくらお母さんでもお兄ちゃんは渡さないよ！」

「あらあら、美香ちゃんにはお兄ちゃんはまだ早いと思うわ」

俺、対象年齢とか決められてるんだろうか？

「そんなことないよ！お兄ちゃんの扱いなら絶対負けないもん！」

「それならお母さんも負けないわよ？」

「風呂、入ってきます…」

もう完全に物扱いになってるじゃんと思いつつ、これ以上巻き込まれる前に退散する。

しかし、毎回のことで疲れはあるが、あれはあれで一つの家族の形なんだと思うとどうしても嫌とは思えなかった。

深夜、寝る前にどうしても確認したいことがあり美里に電話した。美里はいわゆる幼馴染で、香奈ちゃんの姉である。

悟に電話しようとも思ったが、そういえば今日は泣いて帰ったことを思い出してやめた。
めんどくさそうだからな。
程なくして電話が通じた。

「もしもし美里か？」

『そうだけど、こんな時間に珍しいわね』

「ちょっと聞きたいことがあってな」

『そういえば私も言いたいことがあったんだった』

「そうなのか。じゃあ美里からでいいぞ」

『そう？ まあ今日香奈にクレープ買ってくれたみたいだからそのお礼をね』

「そんなの全然気にしなくていいのに」

『恵と美香ちゃんと奈央ちゃんにも奢ってあげたみたいね？ ずいぶん優しいじゃない？』

「なんか言い方に棘がないか？」

『かわいい女の子の中でさぞ嬉しかったでしょうね』

「お礼はどこにいった？！」

急に不機嫌になったな！ 気づいたら棘だらけだよ！

『まあいいわ。それで？あんたはどうしたの？』

「ああ、ちょっと確認したいことがあるんだけどな」

『私で答えられることなら答えるけど』

「助かる」

『このくらいいいわよ。それで確認って？』

「ああ。兄妹だと心を読み合えるって本当か？美里んところは姉妹だけれどどうだ？」

『…なにか疲れることでもあったの？』

とても優しい声で心配された。

おそらく脳の心配をされてるらしい。

「待て！誤解だ！俺の脳は今日も正常運転してる！」

『ホント？けどそんな非現実的なこと言いだすなんてお脳がおかしくなったのかと』

「お脳いうな！ちゃんとした理由はある」

『ふーん。で、その理由とは？』

「美香と母さんが俺の考えてることを読みとってるみたいなんだ」

俺は幼馴染に何を言ってるんだろう？
もしこんなことカウンセラーに相談でもしようものなら確実に病院を紹介されると思う。

『あーあの2人は特別よ。一般的な兄妹はそんなこと無理だから』

「あっさり言うんだな」

『まあ前から知ってることだしね』

…やっぱりうちの家族は変なんだな。

「そうか。けど常識が再確認できたよ。ありがとう」

『いいけど、それが聞きたかっただけ？』

「そうだ」

『ふ、ふーん。それだけなんだ』

「ん？なんかあるのか？」

『別に？』

「別についてお前…」

『そ、それじゃあおやすみ！』

「ああ、おやすみ」

何だっ
たんだ？

#5 いつもの風景。 5（後書き）

ようやく作品の中の日が終わりました。
難しさを実感しております。

「占い」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

占いは悪い時だけ信じるようにしています。

「占い」

恵「はぁあゝ」

功「どうした？」

恵「運勢が…」

悟「運勢？」

恵「うん…。朝のニュースで運勢が最悪だったの…」

功「あーそーいや恵は占いとか好きだもんな」

悟「まあ大抵の女の子はそういうの好きだよな」

功「でもそんな落ち込む必要もないだろ。占いが全て当たるわけでもないし」

恵「そうなんだけど…。今日の運勢はいつもより酷くて…」

功「ほーどんな運勢だったんだ？」

恵「やることなすこと全て裏目にでる一日になるでしょう」

功「まあ確かに最悪な運勢だけど、そんなに落ち込むほどのものでもなくないか？」

悟「占いの最下位の常套句だよな？」

恵「さらに」

功「ん？続きがあるのか？」

恵「さらにあなたが行動すれば周りの人に迷惑が降りかかるでしょう。そして何もしなければ普段親しくしている人に恐ろしい災いが降りかかることになるでしょう。…だって」

功「ホントに最悪な運勢だな！どうしようもねえじゃねーか！」

悟「け、けどラッキーアイテムとかあれば！」

功「そ、そうだな！ちよつとは運勢があがるだろ！」

恵「ラッキーアイテムは一応あったけど持ってなくて…」

功「そんぐらい俺らで用意してやるよ！な！？」

悟「そうだね！そのくらいはさせてもらおうよ！」

功「だから言ってみろ！」

恵「火星人」

功「火星人？！」

悟「アイテムですらないじゃん！」

恵「準備してくれるんでしょ…？」

功「いや、いやいやいや無理だから！」

恵「嘘だったの!？」

功「嘘っていうか、地球に住んでいる限りは…な？」

悟「うん。僕らじゃ大気圏は突破できないからね…」

恵「じゃあ功くんが火星人になってよ！」

功「即席火星人で効果でるのか!？ってかなんで俺?？」

悟「いないよりかはマシなんじゃない？」

功「悟でいいじゃん！」

恵「功くん…」

功「うっ…」

悟「あきらめなよ」

功「……」

2-B教室 以下クラスメイトは『ク』表示

クS「……」

クT「……」

クW「……」

美里「…あんたたち、来たと思ったらなんで手つないでるわけ？」

功「俺、今日は火星人なんだ…」

美里「…恵？　どういうこと？」

恵「功くんは今日ラッキーアイテムだから持ってなきゃいけないの」

美里「…黒川？　説明してくれるよね…？」

悟「しますします！　するから怒らないで！…ってなんで僕がこんな目に…」

美里「なにかいった？」

悟「いえ！　言っていないです！」

美里「で？　どういうこと？」

悟「それがかくかくしかじかで…」

美里「かくかくしかじかじゃわかんないわよ！」

悟「え！？　文字通りに伝わるの！？　便利な機能はないの！？」

美里「わけわかんないこと言っていないで早く説明して！」

悟「はい！今日登校中に伊藤が…」

悟「で、功が火星人になってるってわけ」

美里「あいつも人が良いというかなんというか…。けど後が大変そうね」

悟「あと？」

美里「絶対火星人は噂になるわよ」

悟「確かに…。けど功はなんかふっきれたみたいだよ」

功「S、火星人と握手したいか？」

クS「あ、ああ。ぜひ…」

功「そうかそうか！その右手、大事にしろよ！」

美里「…あれは自棄になってるだけでしょ…」

後日談

後輩A「ねえねえ、あれが火星人先輩じゃない？」

後輩B「ホントだ！握手してもらおう！？」

功「ははは……」

恵「よ、よかったね！人気者だよ！」

功「ああ、そうね……」

恵「うっ、ごめんね……」

功「いや、気にすんな……」

後輩A & a m p ; B「火星人先輩！握手してください！」

功「あははは……」

「中二病ごっこ」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

適当に考えたので果たしてこんな遊びがあるのかは知りません。
作者もやったことありません。

「中二病っつゝ」

功「……………なんで俺の部屋にいる？」

美香「観察してるの」

功「へ、へえー。一応聞くけど何を？」

美香「お兄ちゃんだけど？」

功「……………楽しいか？本読んでるだけだけど」

美香「うん！興奮する！」

功「興奮！？なして！？」

美香「それはねー」

功「いや、言わなくてもいい！」

美香「…そう？」

功「なんでそんなガツカリするかな…。あーなんか本も飽きてきたなあ」

美香「じゃあお兄ちゃん遊ぼう？」

功「いいけど…なにするんだ？」

美香「中二病ごっこ！」

功「なにそれ！？」

美香「おままごとの中二病バージョンだよ」

功「だよって言われても…。なんでまたそれなんだ？」

美香「私中二だからちようどいいかなーと思って！」

功「全然納得できる理由じゃないな！」

美香「じゃあお兄ちゃんは何かしたい遊びがあるの？」

功「いやそういうわけじゃないけど」

美香「ないのに私の提案した遊びを否定するの？」

功「否定してるってわけでもないんだが…」

美香「そういう半端な態度って一番困るんだよね」

功「…すいません。ってなんでこんなに責められなきゃなんないんだよ！」

美香「お兄ちゃんが中二病ごっこに難癖つけるから…」

功「そりゃつきたくもなるわ！絶対恥ずかしいだろ！」

美香「いいじゃん！やってみたいんだもん！」

功「まあ二人だからいいけどな…」

美香「ホント！？ありがとうお兄ちゃん！」

功「で、どういう役割でやるんだ？」

美香「私が襲われる少女役で、お兄ちゃんが少女を助ける少年、あとお兄ちゃんが少女を襲う魔人役でやろう！」

功「ちょっと待て！あたかも3人いるみたいに役割を割り振ってるけど俺だけ2役ってことには気づいてるからな！？」

美香「だって少年はお兄ちゃんしかできないし、魔人も男の方が適任でしょ？」

功「ぐっ！でも正義と悪の2役はさすがに一人じゃ無理があるだろう？」

美香「お兄ちゃんの演技力なら大丈夫だよ！」

功「生まれてこの方演技なんかまともにしたことなんてないわ！」

美香「もう！あんまり文句ばっかだと個人情報流出させるよ！」

功「それは洒落にならないからやめろ！」

美香「じゃあやってくれる？」

功「この状況でうなずく以外の選択肢は選べないだろ…。で、どん

な設定で話が進むんだ？」

美香「まず普通の少女だった私がたまたま通りすがった中二病魔人に襲われて、そこで中二病少年が少女助けだすところから始めよう！」

功「中二病魔人ってもはや人間だろ！？」

美香「実際魔人なんていないからね！」

功「なんでそこは現実的……。あと！薄々気づいてたけど中二病なのは俺の役だけかよ！！お前が中二病ごっこしたかったんじゃないかったのか！？」

美香「だってどんなこと言えいいのかわからないんだもん」

功「なんでさも当然のように俺が中二病なセリフ言えることになってるんだ！」

美香「お兄ちゃん言えないの？」

功「……………言える」

美香「ならいいじゃん！」

功「いやでもな——」

美香「流出」

功「さて、さっそくやるか？」

美香「うん！お兄ちゃん大好き！」

功「……ありがとう」

「中二病ごっこ」(後書き)

続きます。

自分でも続くと思わなかったです。

「中二病」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

前投稿の続きです。

「中二病」

功「で、居間にきたわけだがどうやって始めればいいんだ？」

美香「少女が歩いてたら突然魔人に遭遇するシーンからやろう！あとはそのまま成り行きでね」

功「脈絡もなにもあったもんじゃないな…」

美香「じゃあ始めるよー」

功「そもそもごっこ遊びってこんなんだったか…？」

美香「お兄ちゃん？始めるよ？」

功「はあ…いいぞー」

美香「『ふう…この年にもなると買い物も大変じゃのう…』」

功「はいストップ！！！」

美香「なんで？」

功「それはこっちの台詞だ！明らかに少女じゃないじゃん！これ絶対おばあちゃんだろ！」

美香「えー？これ少女だよ？」

功「何をして信じればいいの!？」

美香「だって体は少女で精神は老女の16歳設定だから少女でしょ？」

功「初耳なんだけど!! なんですでにややこしいのにそんなトンデモ設定加えるんだよ!？」

美香「だってだって私の役だけ普通なんだもん!」

功「普通でいいんだよ! 俺の役が異常なだけだから!」

美香「お兄ちゃんがそういうなら…」

功「なんか俺が我儘言ってるみたいになってるのが納得いかない…」

美香「じゃあ今度は普通の少女でやるね?」

功「頼むぞ。早く終わらせたいんだから」

美香「『買い物ちよつと長引いちやったな…。暗くなってきたし早く帰らなきゃ』」

功「『我が魔眼が疼いている…。今宵も闇をさまよう子羊が近くにいるようだな。フフフ…フハハハハ! さあ来るがよい! その身を我が闇の眷族としてくれようぞ!』」

美香「『なんか暗くて不気味だな…。今日はバスで帰ろうっと』」

功「バスは乗るな!!」

美香「でも普通の少女なら帰りが遅いとバスとか使うと思って。前にお兄ちゃんも私に遅くなるならバスで帰って来いって言ってくれたし!」

功「確かにそうなんだが、バス乗ったら魔人と遭遇できないだろ？」

美香「あ、そっか。忘れてたよ!」

功「帰りは徒歩で頼むぞ?」

美香「うん!じゃあさっきのお兄ちゃんの台詞の続きからやるね」

功「ああ」

美香「『この道何か暗くて不気味…。あ、ちょっと先に誰かいるみたい』」

功「『良く来た子羊よ!嬉しく思え!我が闇の眷族として永遠の命をくれてやる!』」

美香「『あ、もしもし警察ですか?今ちょっとおかしな人に絡まれちゃって。ええ、場所は駅近くなんで交番のすぐそばなんですけど』」

功「冷静に対処すんなよ!! 国家権力呼ばれたら中二病少年の出る前に魔人負けるわ!」

美香「魔人って警察に負けるの!？」

功「手も足も出ずにな! 所詮自称魔人の人間だから! お前が中二病魔人って言ったんだろ!？」

美香「もしかして中二病って弱いのか？」

功「弱いっていうか…そもそもお前中二病ってなんだかちゃんとわかってるのか？」

美香「不可能を可能にする人たちでしょ？」

功「そんな奇跡はおこせねえよ!!」

美香「だって、すごい台詞言ってるし」

功「あれは言ってるだけなの! イタイ発言するのが中二病っていうんだよ」

美香「そうなの!？全然だめじゃん!」

功「なんだよ…。勘違いしてただけか。じゃあこの遊びも終わりだな」

美香「ごめんねお兄ちゃん…。私の勘違いで変なことお願いしちゃって…」

功「…まあ今回はいいよ。気にしないでいい」

美香「ありがとうお兄ちゃん！じゃあ今度はちゃんと設定考えてから誘うね！」

功「中二病ごっこはもうやめろ！」

#6 学級委員を決めましょう。(前書き)

閲覧ありがとうございます。

#6 学級委員を決めましょう。

……なんてこうなった？

俺は今、自分の置かれている状況を理解できていなかった。
否、脳が理解することを拒んでいた。

「では、学級委員長になった大藤君に一言挨拶してもらいましょう
！」

……なんてこうなった？

朝である。

学生であるからには学校に行かなければならない平日の朝。
入学シーズン、年度初めの四月の初旬。

まだ肌寒いが、清々しさのある朝。

そして、一階から漂うみそ汁のうまそうな匂い。

母さんは料理が非常にうまいので、毎回楽しみにしていたりする。
そんな朝だが、俺は惰眠を貪っていた。

「……」

クラスのSHRが始まるのは8…30分。
登校にかかる時間20分。

そして現在7…45分。

今起きれば着替え、洗顔、朝食を済ませ、SHRの始まる前にはクラスに着くだろう。

絶好の起き時間だ。

「：絶好の起き時間ってなんやねん」

自分にツツコミをいれる意味はないが、気にしないでほしい。

なんか寝起きて独り言が増えるんだよ。

しかし、春眠暁を覚えずとはよく言ったものである。

ホントに春は気持ち良く寝れるな。

「：起きるか」

まだまだ寝たりなく感じるのは否めないが、そろそろ起きないとまずい。

ちなみに時間がまずいんじゃない。

俺は遅刻くらいなら全然できる。もともとめんどくさがりなのだ。じゃあ何がまずいかって？

妹だ。

大藤家において妹という立ち位置に存在している大藤美香。

なぜか俺を異様に慕っている、妹。

：まあ理由に心当たりがないわけじゃあないが。

これだけ聞けばまあかわいいもんかもしれないが、実際は恐ろしい。頭はよくないが運動神経は高いという、馬鹿っぽさが全面にでている行動。

それはまだいい。

家事やら裁縫やら女の子っぽいこともできない駄目っぷり。

それもまだいい。

これらだけなら、しょうがないなあと思っていられる。

しかし、兄の俺が本気で貞操の心配をしなければならぬ行動を時々起こす。

これはアウトだ。

特に危ないのが朝だ。

俺が起きてないと、おはようのキスなどという新婚夫婦でさえ恥ずかしがるような行為を迫ってくる。

それを未然に防ぐため、朝寝坊はできないのだ。

「着替えるか…」

パジャマを脱ぎ、制服に着替えようとYシャツに手を伸ばしたところで急に部屋のドアが開いた。

「おはよーございまーす…」

「おはよう。で、なぜ小声？」

「ちっ起きてたか。おはよう！」

「不吉な呟きが聞こえたぞ!？」

寝てたらやっぱり何かされてたのか!？

「っってお兄ちゃん裸じゃん！」

「裸ではないからな？」

ボクサーパンツは履いてるぞ？

しかしキャーとか言ってるところを見ると、やっぱり年頃なんだなあ。

妹の羞恥心が確認できてちょっと安心したな。

「もうお兄ちゃん！恥ずかしくないの！？」

「すまんすまん。ってなんで写メ撮ろうとしてるんだ！？」

前言撤回。

言葉だけで羞恥心は微塵もなさそうだ！

「兄の成長記録を妹はつけないといけないからね！」

「そんな義務はどこにもない！」

いまどき父親ですらそんなことしてないぞ！

「で、起こしに來ただけか？」

「うん、お母さんが朝ごはんだから降りてきてって」

「わかった。すぐ着替えて行くから先いつてな」

「わかった！」

聞き分けのいいところはかわいいんだけどな。

それでももう少し大人しくなってくれば文句もないんだが…。

「そうだお兄ちゃん。最初の地の文がちょっと長すぎじゃない？」

「お前は世界観をぶち壊すようなことを言うな！」

地の文とかいうなよ！
常識を身につけろ！

「おはよう母さん」

「おはよう功ちゃん。あらあら、ぐっすり寝れたみたいね？」

笑いながら頭を手櫛でといてくれる。
寝癖があつたらしい。

「ありがとう」

「いいのよ。ほら、時間もあんまりないから朝ごはん食べてちゃつて」

「いただきます」

みそ汁を一口すする。
うまい！

と、顔に出たのか母さんが嬉しそうな顔をする。
恥ずかしいな。

「ごちそうさま。おいしかったよ」

「お粗末さまでした」

「じゃ行ってくる」

「いってらっしゃい。気をつけるのよ」

時間が結構押していたので食べ終わってすぐ家をでる。

「美香、早く来ないと置いてくぞ!」

「行く行く今行くー!」

「何してたんだ?」

「さっきの写メをなんでもないよ!」

「何してたんだ!!」

結局撮られてたのかよ!!

「いってらっしゃい」

#6 学級委員を決めましょう。(後書き)

続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1856ba/>

笑い日和。

2012年1月9日22時01分発行